

無量寿寺

親鸞はしばしば鹿島神宮へ参詣した。鹿島明神への帰信のためである。

今日では、神社と仏教をはっきり区別されているが、親鸞当時は神仏混淆で、鹿島明神も2つの性格を持っていた。一つはもちろん武甕槌大神(たけみかづちのおおかみ)という祭神である。武甕槌大神は国土鎮護の神、武人として仰がれ、源頼朝なども拳兵に際して尊崇した。一方、この鹿島明神に仏教の意味が加味され、鹿島明神は十一面観音であるとする信仰が平安時代から起こっていた。その姿を変えて現れ、悩める人を救ってくれる観音菩薩、親鸞の終始変わらぬ観音信仰は鹿島にもあった。

しかも、鹿島神宮の氏子たちの多くは霞ヶ浦を中心とする川の民人であった。そこには、聖徳太子が観音に化現して現れる太子信仰との深い結びつきがあったのである。親鸞は折りを見て幾度となく鹿島神宮に詣でた。もちろん境内には神宮寺や護国院といった寺院もあり、親鸞はそこに詣でる人たちに仏法の真実を説法したのであった。

ある時、親鸞の法座に白衣の老人が聴聞した。その姿は明かに神官の容姿である。老人は親鸞の話聞き終わると、

「法名を授けてくだされ。」

と親鸞に願い出た。親鸞は喜んで「信海」と名づけた。それからしばらくして、鹿島神宮の大宮司である尾張権頭信親に鹿島明神がこう託宣した。

「親鸞聖人に帰依し、法名を賜った。お礼に井戸と戸帳を献じたい。」

信親は驚いて、神殿の戸帳を見ると、「釈信海」という法名が無数に書き連ねられている。

「これは鹿島明神が親鸞聖人に帰依した証しに相違ない。」

そこで信親は神託に従って、稲田にいる親鸞に会い、

「私も鹿島明神の帰依した聖人に随給したいが、明神に仕えねばならぬ身、私の身代わりに一子を聖人に仕えさせてください。」

と懇願した。そこで親鸞は信親の子どもに順信という法名を授けて、常に随給させ、教化に励んだのであった。この順信こそが鹿島門徒といわれる念仏者を統率した人物である。

親鸞が順信を伴って布教していた時のこと、鳥栖(とりのす)に無量寺という禅寺があった。その寺の墓地に地頭の村田高時の妻が葬られていた。高時は懇ろに申したが、成仏できないのか、幽鬼となって現れていた。生前は美人の誉れ高かった若妻の姿は、口が避け、目は血走り、見るも恐ろしい姿である。地元の人々は元より、住職さえも恐れをなして寺に寄り付こうとしない。寺は文字通り破院無住となって荒れ果て、幽霊の悲しい泣き声だけが響き渡っていた。高時や地元の人々は幽霊の迷魂を供養せねばと思い、鹿島神宮参詣の親鸞に済度を頼んだ。親鸞は与沢の長島喜八の亡妻になしたと同じように、小石に浄土三部経を書き、高時の妻の墓へ埋めた。その結果、恐ろしい幽霊は菩薩に変じ、無事往生を遂げることができたのである。

「弥陀たのむ心おこせよ皆人の、変わる姿を見るにつけても」

親鸞がこの時に詠じた歌である。無量寺は順信に託されて、無量寿寺と改名し、鹿島一帯の念仏道場となったのである。(武田鏡村)